

第1回 百間川河口水門周辺有効活用方策検討協議会 議事録

日時：平成13年5月11日 14:00～16:30

場所：三光荘

資料：議事次第等(議事次第、設立趣旨、フロー、協議会の進め方、配席表)

資料-1 (旭川改修計画、水門の構造、防災拠点等)

資料-2 (河口水門周辺の環境、漁業、史跡等)

資料-3 (環境調査計画)

内容

1) 所長挨拶

- より多くの人の知恵を借りて、よりよい環境のものを作っていききたい。
- (これまでの事業の経緯説明)
- 自然環境や周辺の歴史に配慮したものとしたい。

2) 出席者紹介

3) 設立趣旨 説明

- 水門建設によるメリット・デメリットあるだろうが、できるだけメリットを引き出すようにしたい。

4) 協議会の進め方 説明

5) 資料-1～3 説明

6) 議事要旨

委員：河口水門建設前の昭和35年頃にもこのような会議を開いたが、その当時の約束とずいぶん違うと認識している。昭和42年に河口水門ができて、その後10年ぐらいはよかった。平成になって、「ひどめ」(水門を開けず、百間川から海に水を出さないこと)をするようになった。何故、操作方法を変えたのか。

また、平成10年の10号台風の時は、台風が来るのがわかっているのに、水門を開けるのが遅かったと認識しているが。

事務局：どのような操作をしているのか確認し、次回に提示したい。

委員：資料-1 p.5 の「砂川 490m³/s(450m³/s)」とは、どういう意味か？

事務局：490m³/s は砂川のピーク流量。(450m³/s)は、百間川がピーク時の砂川からの合流量。

委員：資料-2 p.1 の「流速(m³/s)」は間違いか。

事務局：流量を表したものであり、修正する。

委員：資料-2 p.1 の距離標がマイナスとは。

事務局：洪水が広がる仮想断面のことである。

委員：淡水と海水の成層は考慮しているか？

事務局：していない。

委員：以前は引き潮の時は常に水門を開けていたが、今は水が溜まらないと開けない。溜めるだけ溜めて水門を開けたら、流速が速くて稚魚も上れない。

また、夜間の照明が明るすぎて、魚は上らないと思うが。

委員：川魚はそれぞれ上る時期、下る時期があるが、だいたい夜間が多い。照明のことはわからない。

委員：上層は川から海へ流れていても、下の方は潮が上がるということもある。

委員：東南の風が吹くと児島湾から水が押し寄せてくる。うなぎが遡上する時期でも止樋や照明を照らしている。児島湾の水は、どう変わってきているのか？

委員：児島湖締め切りの影響が大きい。洪水は上を広がっていき、洪水の時は押し出している。

事務局：照明については「照明を何故そこまで明るくしているのか」「他にもれないようにする方法があるのでは」、また、操作方法については「台風のとくに開けるのが遅いのでは」「日常的に川に溜めすぎでは」とのご指摘があったので、次回に回答したい。他にご意見があればいただきたい。

委員：高島干潟は、現在の河口水門ができ低くなっている。さらに河口水門を増築すると干潟はもっと低くなるのではないかな。

事務局：現状を調査するとともに解析して報告したい。

委員：高島干潟のあたりは、昔は藻が生えていたが、今はカキ殻が露出し、魚もいなくなった。また、水深の深い所に土、ゴミやジュースの缶などが溜まり、浅くなってきている。

事務局：ゴミの問題については、みなさんからのご意見を聞きながら対応したい。

委員：平成10年の10号台風の時、旭川ダムが事前放流せず、放流が遅れたので、ノリ網が流されたり、流木が網に絡んだりして、大きな被害を受けたが、何の援助もなかった。旭川の雑木や堆積土砂を放置しておいて、何故、百間川に多くの水を流すのかよくわからない。まず、本流の川底をきれいにして、それでもだめなら百間川に流すのが筋ではないかな。
また、百間川にスポーツ公園などを整備して遊べるようにする一方、多くの水を流せば壊れるようになるのではないかな。

事務局：旭川と百間川、両方バランスよく整備している。高水敷はめったに水が流れないので、平常時にほっておくのはもったいないという考えで、何年かに一度は洪水に浸かることを前提に整備している。

委員：昔、水防活動をしていたとき、高潮で水門が上がらないときに、水が出るのを恐れていた。水門が上がると、みるみる水が引いた。水門が上がらないときに、どれくらい百間川が耐えられるのか教えて欲しい。

事務局：整理し、次回、説明したい。

委員：生活排水やごみの問題は、農林省・国土交通省・県・市など関係行政が連携して取り組む必要があるのでは。百間川の水はきれいだが、生活排水をほったらかしの状態は問題だ。河口水門を作るのは反対しないが、うなぎや魚が上れるようにしてほしい。例えば農林もU字溝をやめ、土積みにするなど考えてほしい。

委員：河口水門増築後の干潟の動きはどうなるのか。また、現在の河口水門の建設当初も調査はしているのか？

事務局：よくわからない。

委員：前の現状がわからないのなら、今調査しても検討できないのではないかな？

事務局：昔の海図を調べたり、話を聞いたりすればわかるのでは。

委員：高島干潟のところが溝のようになっている。このため、魚がいなくなっている。水門から出る水の量が多くなると、影響が大きくなると思う。

事務局：今後、干潟への影響について検討する。

委員：高島干潟は、昔はドロ干潟だったが、砂干潟になっていると聞く。これは、百間川の影響なのか、新岡山港の影響なのかかわからない。各省庁にまたがって、昔の資料を集めることも重要だ。

- 委員：裸岩は、岩よりもカキ殻のほうが高くなっている。昔は水草もあり、深かった。今は浅くなっているし、児島湾全体が浅くなっている。河口水門ができてからこうなったのだから、河口水門の影響ではないか。
- 委員：先程、委員が「百間川の水はきれい」と言ったが、それはテニスコートやゴルフ場のあたりではないか。砂川合流点～水門のあたりは決してきれいとは言えない。百間川のカンプナは、人が食べられず鳥の餌にしかならないので、一缶 60 円でしか売れない。水質ワースト 3 の児島湖でも 120 円～160 円だ。百間川のウナギは 15 日以上清水に置いておかないと、臭くて食べられない。川底のドロが汚いからそうなる。水門を広げて底のドロを出したら、海の魚も食べなくなる。このドロが海に流れないようにして欲しい。
- また、国道 2 号より上流の木を切れば、水門を拡げなくてもいいではないか。河口水門が上がる前と上げている時の水の流れの写真を撮ってきたので、見てほしい。昔は百間川にも「ヒシ」があったが、今は 1 本も生えていない。
- 委員：水質がきれいと言ったのは、前よりもきれいになった、ということだ。生活排水を抜きにしては考えられない。国土交通省だけではなく、縦割りを横割りにするような対策が必要だと思うし、河口水門をうまく利用する方法はないかと思うが。
- 委員：沢田あたりから生活排水が入ってくる。それより上流はきれいだ。水門を拡げるより先にヘドロの浚渫をすべきだ。整備する順序が違うのではないか。
- 委員：ゴルフ場からの水がどれくらいで流れてくるか知っているか？ 5 時間したら流れてくる。旭川のゴルフ場には処理施設がないが、玉野は 7 つもある。
- 事務局：確認し、協議会に提示したい。
- 委員：調査項目としては、強熱源量などよりも酸化還元電位がよくわかると思う。有明湾や長良川でもこれがプラスからマイナスに変わった。影響がすぐにわかるので、調査項目に入れて欲しい。粒径や強熱減量よりも酸化還元電位は過去の挙動を示している。特に夏の調査を。
- また、川から海への流れの状況は、山の上からみればよくわかる。
- さらに、淡水と海水が接触するところでは、粒子の粒が凝集して大きくなる。これがどこに溜まるか調べてもらいたい。
- 委員：清内橋下流の左岸は、築堤のときに川の中を一部掘削しているが、中州が残ったまま工事が中止されている。国土交通省からは自然を守る会が「残せ」と言ったからと聞いたが、あれは人工につくったもので自然ではない。このために害虫がたくさん出て、予防に費用がかかるという苦情が来ている。水流の妨げにもなるし、とってもらいたい。
- 委員：補修用ゲートの設置で道路が 1 週間通行止めになるのは非常に困るが。
- 委員：また、リサイクル法以降、不法投棄を気にしている。いったん堤防が汚されると、収集がつかなくなる。堤防に樹木を植えるのは危ないと聞いたが、堤防の美化ができないか。「きれいな堤防を作る」ということで不法投棄を防止できないか。そういう形で維持管理にも協力したい。
- 委員：底質環境については、既存のデータもあるが十分ではない。底生生物の調査をして欲しい。長期間の状態を示すものとして重要だ。
- 委員：きちんと調査する必要がある。昔は、地元の長老からヒアリングして工事をしたと聞く。各省庁の報告書をできるだけ収集して、反映させるようにすべきだ。
- 委員：河口水門がなければ旭川と同じように潮が上がるが、旭川では城のあたりまで上がってくる。表層から 2 メートルの所でも、ほとんど海水の 10% 引きくらいの塩分濃度である。水温は、冬場でも

下の方は20 くらいある。潮水が水門の中に入ってきて滞留すると、水質が悪くなる。水質を守るためには、潮水を入れないようにしなければならない。

委員：水の流れと魚への影響について考えていかねばならない。町づくりや堤防の美化は、流域全体の問題だ。現在の状況で河口水門を拡げると、ドッと流れてくると思われているようだが、「大洪水のときの対応」と「中洪水のときの対応」と「平常時の操作」のそれぞれについて、どういうことが起こるか整理しておく必要がある。平常時の話としては「幅が倍になると底質の流出がどうなるか」ということだ。浄化対策は同時に進める必要がある。

委員：水質については、河口水門だけでなんとかしようとしても限度がある。発生源をなんとかしなければならない。水は動かした方がよい。溜まり水は汚くなる。塩水が入ると溜まり水になる。だから潮水は入れないほうがよい。表層は動かしたほうがよい。平常時の操作方法については、検討する価値がある。洪水のときは比較的単純だと思う。

委員：児島湾の水は、昭和53年ぐらいから「あまくなった」と聞いている。高島干潟の状態には驚いた。生物相が変わった。今では深いところの藻類が浅いところまで来ている。ただし、河口水門だけが原因ではないと思っている。

また、水質については、上流・下流一体となって、下流の人が山に木を植えるとか、排水に注意するとか、上流の人への働きかけなどが必要。熊本の緑川に例がある。また「ゲートの開ける時間を長くする」という方法があるかもしれない。

事務局：今回出た意見をまとめると、

- ・平常時と洪水時のゲート操作の状況
- ・水門照明を明るくしている理由
- ・百間川での潮の動きを検討する
- ・河口水門の増築により流れがどう変わるか、どう調査するか
- ・そのときに今までのデータをよく調べる
- ・流木及びゴミの問題
- ・淡水と海水の接触やこれによる土の堆積
- ・中流域の河川整備とのバランス
- ・底泥の浚渫
- ・増築水門のゲ - ト補修時の1週間の通行止めは困る
- ・大洪水と平常時に分けて操作の工夫、水質改善できるか
- ・水質汚濁の発生源対策
- ・上流域の人への取り組み
- ・長老へのヒアリング
- ・他省庁との連携

であったとし、整理し、次回の協議会で提示したい。なお、協議会は2ヶ月に1回ぐらいとして、次回は7月の上旬～中旬を目途として、6月の上旬ぐらいに都合をお聞きしたい。

以上